

森林再生の“心”母国へ

進和学園「いのちの森づくり」を視察

掲載号：2009年11月19日号



社会福祉法人会「進和学園」(出縄明理事長)の森林再生プロジェクト「いのちの森づくり」を学ぼうと11月13日、JICA研修「アジア・アフリカ荒廃地の植生回復」コースの研修生が同学園を訪問した。

同学園が3年前から取り組んでいる「いのちの森づくり」プロジェクトは、施設の知的障がい者らが湘南平などでアラシやスタジイなどの木の実を拾い集めて育て、行政や企業が植樹活動に利用するポット苗を納入するというもの。現在約7万本のポット苗が栽培され、森林再生や緑化活動に貢献している。

今回、JICAの研修を引き受けた国際生態学センター(宮脇昭センター長／横浜市)が、先進的な植樹プロジェクトを実施している同園に協力を要請した。同園への訪問は昨年に続き2回目。

今回同園を訪れたのは、アジア5カ国(ミャンマー・ラオス・マレーシア・インドネシア・フィリピン)、アフリカ2カ国(ブルキナファソ・ケニア)からの計12人の研修生。各国で森林保全機関の研究者や、指導者を務め、多くの参加希望者の中から選ばれて同コースに参加している。

当日は同学園の取組みが放送されたテレビ番組の放映やプレゼンテーションを受けた後に、「進和万田ホーム」「しんわルネッサンス」で植樹状況を視察。ポット苗を育成している「どんぐりハウス」も訪問し、森林再生の理念や特徴的な手法を学んでいた。同学園の職員から苗栽培の説明がされると、研修生らは苗を実際に手にし、興味深そうに話に聞き入っていた。

マレーシアの熱帯生物保全機関で講師を務めるエリアさんは「マレーシアでは森林が年々減少していることに目を向ける人が少ない。国は違うが、進和学園の取組みを見て同志がいたようで、温かい気持ちになった。ぜひ生徒たちにこの経験を伝えたい」と研修の充実ぶりを笑顔で話した。研修生は県内の環境保護施設等を約1カ月半の日程で訪問し、帰国する。

同学園の授産事業を管理する(株)研進の出縄貴史社長は「研修生のみなさんが、私たちの取り組みを各国に持ち帰って広めてくれれば嬉しい。また来年以降も要請があれば講師を引受けたい」と話した。